詩編第42編神に渇く

2021年10月20日

井田泉

My soul thirsts for God for the living God



1 【指揮者によって。マスキール。 コラの子の詩。】

- ・この42編は次の43編と一つの詩編とされる。
- 「マスキール」(13箇所)は意味不詳。「悟り」「教訓」の意か?
- 「**コラの子**」(11箇所)は神殿合唱隊(今でいう聖歌隊)のことらしい。 「ヨシャファトは地にひれ伏し、すべてのユダとエルサレムの住民も主の御前に伏して、主を礼拝した。レビ人のケハトの子孫と<u>コラの子孫</u>は立ち上がり、大声を張り上げてイスラエルの神、主を賛美した。| 歴代誌下20:18-19

- 2 涸れた谷に鹿が水を求めるように 神よ、わたしの魂はあなたを求める。
- 3 神に、命の神に、わたしの魂は渇く。 いつ御前に出て

神の御顔を仰ぐことができるのか。

4 昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。 人は絶え間なく言う

「お前の神はどこにいる」と。

- ・鹿は水を求めるが、 谷川は涸れていて得られない。
- そのようにわたしの魂は神を渇き求めるが、 確かな神との出会い・交わりを得られない。
- ・詩人はエルサレムから追放されて遠い地から神を慕い求める。
- ・2節は神への呼びかけ
- ・3節は自分の中での思いのほとばしり。
- ・「いつまで」続くかわからない苦しみ。
- ・神はご自分の顔を隠しておられる。 (関連→イザヤ8:17)
- ・悲しみのあまり絶えず涙を流す。涙は頬を 伝って口に入る。
- ・しかも無理解の人(あるいは敵対する人) は「お前の神はどこにいる」と非難をあび せる。

2節「命の神」 (9節も)

- ・生ける(生きておられる)神、命そのものである神、命の源である神。
- ・その神から隔てられていることが詩人の嘆き。 それでも「命の神」と言う――絶望の手前で耐えて信仰を告白している。

「神の御顔」 (6、11節も)

- ・一般的には、神の顔を見ることはできない(出エジプト記33:20)。
- ・しかしながら「御顔を仰ぐ」ことは非常な幸いとされた。 「わたしは正しさを認められ、<u>御顔を仰ぎ望み/目覚めるときには御姿を拝して</u> /満ち足りることができるでしょう。」詩編17:15
- ・祭司は次のような言葉で民を祝福した。(結婚式の祝福に用いる) 「主が<u>御顔を向けて</u>あなたを照らし/あなたに恵みを与えられるように。 主が御顔をあなたに向けて/あなたに平安を賜るように。| 民数記6:25-26
- ・詩人は「神の御顔を仰ぐ」ことを切望している。

- 5 わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす 喜び歌い感謝をささげる声の中を 祭りに集う人の群れと共に進み 神の家に入り、ひれ伏したことを。
- ・「魂を注ぎ出す」とは、魂が空っぽになるほど祈ること。
- ・詩人はかつてのエルサレムでの礼拝を 思い起こす。

幸せだった礼拝

- ・「人の群れと共に進み」入堂の行列(プロセッション)
- ・「ひれ伏す」は祈りの非常に深い姿。 詩編に16回、新約聖書には37回ある (新共同訳)。
- ・イエスはゲッセマネでひれ伏して祈ら れた。マルコ14:35

| 少し進んで行って地面に<u>ひれ伏し</u>、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、……|

- なぜうなだれるのか、わたしの魂よなぜ呻くのか。 神を待ち望め。 わたしはなお、告白しよう 「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ。
- ・ここは畳句(リフレイン) 12節と43編5節に繰り返される。
- 「わたしの魂よ」自分で自分の魂に呼びかける。
- 自分を励ます。「神を待ち望め」 神を渇き求めよ!
- ・呻くほどの苦しみの中で、なお詩人は 神への信仰を告白しようとする。
- ・「御顔」 神が顔を背けず、こちらを 向いてくださることがわたしの救い。
- ・神に呼びかける。「わたしの神よ」神との間がはるかに隔てられているとしても、神はなお「わたしの神」。

- 7 わたしの魂はうなだれて、 あなたを思い起こす。
 - ヨルダンの地から、ヘルモンとミザルの山から
- 8 あなたの注ぐ激流のとどろきにこたえて 深淵は深淵に呼ばわり 砕け散るあなたの波はわたしを越えて行く。

- ・詩人は自分の魂に呼びかけた後、 神を思い起こす。
- ・詩人は激流とその轟きを感じる。
- ・「深淵」原始と混沌の大水 (創世記1:2)が襲いかかる。 詩人は滅びに瀕する。

9 昼、主は命じて慈しみをわたしに送り 夜、主の歌がわたしと共にある わたしの命の神への祈りが。

- ・「主は」 ここのみ神が主語。滅び に瀕した詩人に神が働きかける。
- ・かろうじて神の慈しみに守られ、 「主の歌」によって支えられる。歌が祈りとなる。

地名

ヨルダン ヘルモン 約3000メートル ヨルダン川の源流

「ミザルの山」は位置不明 意味は「小さい山| ガリラヤのイエス ・アビラ アビレネ サレプタ ヒッポス ヘルモン山 ティルス イトラヤ フィリポ・カイサリア バタネア ラファナ (カピトリアス) プトレマイス (アッコ) カファルナウム カルメル山 ティベリアス ドル 地中海 タボル山 デカポリ スキトポリス・ カイサリア ▲エバル山 ヤボク川 ゲリジム山▲・シカル ヤツファ リダ ● アリマタヤ? ■ エフライム● ・フィラデルフィア アマウス(エマオ) エリコ アシュドド(アゾト) クムラン アスカロンユ ヘブロン・ アルノン川 ラフィア ベエル・シェバ 現代の 海岸線 30 mi. ゼレド川 40 km.

- 10 わたしの岩、わたしの神に言おう。 「なぜ、わたしをお忘れになったのか。 なぜ、わたしは敵に虐げられ 嘆きつつ歩くのか。」
- 11 わたしを苦しめる者はわたしの骨を砕き 絶え間なく嘲って言う 「お前の神はどこにいる」と。

・神をなお確固たる「わたしの岩」 と言いつつ、神に問う。自分は神 忘れられたとしか思えない。

- ・内には、神から遠ざけられ見放されたとしか思えない苦悶があり、外からは拷問のような迫害がある。
- 「お前の神はどこにいる」このような嘲りと、内に抱える疑いは手を結んでいるかのようである。

12 なぜうなだれるのか、わたしの魂よ なぜ呻くのか。 神を待ち望め。 わたしはなお、告白しよう 「御顔こそ、わたしの救い」と。 わたしの神よ。

パレストリーナ Palestrina

♪ Sicut cervus - 詩編第42編

The Cambridge Singers

涸れた谷に鹿が水を求めるように神よ、わたしの魂はあなたを求める。



- ・6~7節の繰り返し
- ・崩れ去りそうな<u>わたしの魂</u>(この詩編 冒頭の主語)に対して、自分から呼び かけ励ます。
- ・ぎりぎりの苦闘の中で、信仰の決意を 示す。
- ・最後の「わたしの神よ」から<u>トマス</u>を 連想する。トマスは復活の主イエスに 出会えず、苦しみの1週間を経た後、 復活のイエスに出会い、

「わたしの主、わたしの神よ」

と告白する。ヨハネ20:28

・この詩編全体は、復活の主に出会うまでのトマスの苦しみと祈りととも理解できる。

詩編第42編から主イエスを思う

- わたしたちの救い主イエスは、この詩編の苦境と呻きと祈りを、ゲッセマネと十字架においてご自身のものとされた。
 イエスは十字架の上で「渇く」(ヨハネ19:28)と呻かれた。
- わたしたちはこの方によって受けとめられ、受け入れられ、担われている。
- わたしたちはやがて主イエスを顔と顔を合わせて見る(|コリント13:12) 幸いを約束されている。



「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。<u>だがそのときには、</u> <u>顔と顔とを合わせて見ることになる。</u>わたしは、今は一部しか知らなくとも、その ときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」

神への渇き求めは必ず満たされる。
 「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」ヨハネ4:14